

かいたく

教会のない地域に教会を 剖り入れ場に働き人を



2018年JBBF国内宣教カンファレンス

日本宣教の新しい視点

日本の文化的背景と靈性、宣教の現状を見据えて

講師：齊藤秀文先生 婦人集会：笹妙子先生・松下アンナ先生



自分自身にも、教えることにも、よく気をつけなさい。働きをあくまでも続けなさい。そうすれば、自分自身と、あなたの教えを聞く人たちとを、救うことになるのです。（イテモテ四章十六節）

私たちはしばしば他人を觀察して、「ああすれば良いのに、こうすれば良いのに」と思つて批判してしまうことがあります。しかし、使命感や周囲の期待に応えようとして、その能力を超えて無理をし、失敗やミスを犯してしまい、更に批判を招いてしまいます。

ドキュメント番組で、父親が家族のために犠牲を払い、一生懸命に働いて家族から愛されている様子が映し出されているのを見かけます。しかし、牧師家庭は、教会のため、また信徒のために、家族を犠牲にし、子供たちに不自由な思いをさせてしまうことがあります。ボイスにも書きましたが、先日のカンファレンスで、教役者（牧師や伝道師）の所得アンケートを行い、想像以上に厳しい状況であることが分かりました。一般人だったら、「こんなんじゃやつてらんない！」と不満を言つて辞めていくでしょう。しかし、カンファレンスに参加した教役者はちは、使命感を持ち、また少しでも期待に応えられる者になろうと努力し、そして学んでいました。

どうか、そんな教役者の良きアドバイザー、良きサポートであつていただきたいと願います。また教役者たちには、何歳になつても他の人の声に耳を傾け、自分自身にも教えることを怠らず、働きを継続していただきたいと願います。

日本宣教の新しい視点

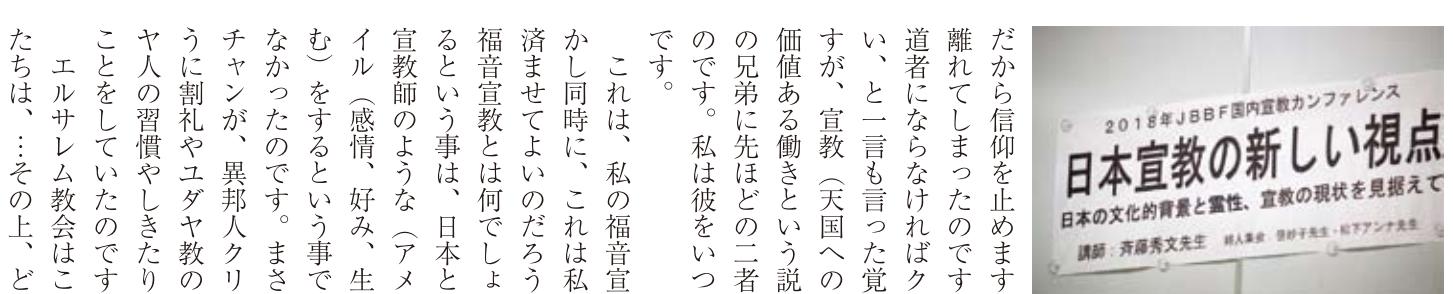
日本の文化的背景と靈性、宣教の現状を見据えて

金沢聖書バプテスト教会 斎藤 秀文



さて私たちJBBFは、太平洋（大東亜）戦争敗戦直後に、米国から派遣された四組の宣教師家族の使命（mission・ミッション）によって始まりました。すでに70年経ちます。その結果、ある意味で教会は、広がり（福音の広がりとは異なる）ました。また同時に教会は、「魂の救いこそが唯一価値であること」という宣教の最前線基地としての役割を担つてきました。結果、福音宣教とはイエスキリストを信じる信仰告白を何としても引き出そうとした歴史でもあつたように思います。そこには、福音を信じて生きるとは、どう生きる事なのかを問う事もなく、ただ魂を勝ち取る以外になく、自分は一生懸命に伝道（トラクトをもつて個人に信仰を迫る）に従事するクリスチヤン（信徒伝道者）と信じる信徒伝道者養成を、目標にしてきたようです。

私が開拓伝道に遣わされた当初、次のようなことが起きました。信仰告白した兄弟が私に「先生、もう教会に来ません」と言いに来たのです。私はあわてて兄弟に「なぜですか、理由は何ですか？」と聞いかけました。彼は私に「私は、だから信仰を止めます」と言い、教会を離れてしまったのです。私は決して、伝道者にならなければクリスチヤンではない、と言も言つた覚えはなかつたのですが、宣教（天国への魂の獲得）こそが価値ある働きという説教を毎週語り、その兄弟に先ほどの二者択一を迫つていたのです。私は彼をいつも脅迫していたのです。



これは、私の福音宣教の問題です。しかし同時に、これは私個人だけの問題と済ませてよいのだろうかと考えました。福音宣教とは何でしょうか。福音を信じるという事は、日本と異なる文化にある宣教師のような（アメリカ式）生活スタイル（感情、好み、生活習慣＝服装も含む）をするという事ではないと伝えていたのです。まさにユダヤ人クリスチヤンが、異邦人クリスチヤンにしたように割礼やユダヤ教の律法をはじめユダヤ人の習慣やしきたりを強いたのと同じことをしていたのです。

エルサレム教会はこの時、「聖靈と私たちは、…その上、どんな重荷も負わせないことを決めました。すなわち、偶像に供えた物と、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けることです。これらのこととを注意深く避けていれば、それで結構です。以上。」（使徒の働き一五章二八（二九節）という画期的な結論を出した。ユダヤ人クリスチヤンは、福音を信じても守っていたユダヤ教の習慣や価値観を、異文化のクリスチヤンたちに押し付けて混乱を招いたのです。ユダヤ人たちにしていたことを、この日本でも行つていたという事になります。

キリスト教信仰の土台となつていた、ユダヤ教徒の築いてきた文化（生活習慣や思想）さえも福音の名のもとに強いいらしさを、異文化のクリスチヤンたちに押し付けていたのです。ユダヤ人クリスチヤンたちが異邦人クリスチヤンたちにしていたことを、この日本でも行つていたという事になります。

れではないことを認めたのです。文化は福音と癒着して、その本質を損ない歪めてしまうことが起こるのです。ですから、福音の本質と福音を伝えた人の文化（生活スタイルや習慣）を区別しなければなりません。

このことは、聖書記者が生きた時代の言葉と文脈を通して、その文化的背景と言語（旧約＝ヘブル語とアラム語、新約＝ギリシャ語）で著されていることで明らかです。ですから第一義的に宣教とは、その原語で伝わる（その時代の文化にある）人々に語られたものであることを前提とします。その上で、聖書記事を文脈的にも検討して解釈し、福音の本質を確認します。

宣教において大切なことは、先ずクリスチヤンが聖霊の助けによって、福音の世界観で生きることです。福音と矛盾した生活は、福音を現代人に理解できる言葉と文脈（文化）で伝えていないことなのです。これが異文化人への伝道ではないかと考えます。



日本宣教の新しい視点
～福音宣教の歴史と実践～

婦人集会レポート



伝道者としての歩みを通して、主が私に教えて下さっていることは「御言葉を実行する人」になることです。神様の御言葉を、頭だけで理解するのではなく、自分の生活の中で、本当に信じ従っているのか、実践しているのか、ということを問いかけられています。

A portrait of Dr. Linda K. Tsui, a woman with dark hair, speaking into a microphone.

第一婦人集会
講師
笹 妙子 先生
調布
パブリックランチ

して共に成長していくことが出来ます。主に拵り頼み、この交わりを続けることが大切です。（箴言三章五節）

私は与えられた多くの経験は、私が主の御言葉を実際に行う者となるためのもの。このことに気づく時、主のお取り扱いのすべてを感謝することが出来ます。

御言葉を行う者となり、実際の経験に基づいた生きた御言葉を伝える者となり、主に愛されている人々に寄り添い、共に歩んでいきたいと願つております。（ルカ二二章三三節）

婦人伝道者としての歩みの証し

A portrait of Anna Matsushita, a woman with dark hair, wearing a grey cardigan over a blue top. She is smiling and looking slightly to the right.

神学校を卒業後特に始めの数年は、教会の働きとアルバイトとの両立に慣れず、なすべき働きだけで精いっぱいだった私は、奉仕をこなすことで、何とか伝

仕える喜びを失い、高慢な者となつていては、そのような私を碎き、少しでも謙つた主の器になるようと、お取り扱いの試練を与えられました。私は恐れに囚われ、この伝道者生活を辞めたいと思い、逃げ道を考えたりしました。しかし、神様は御言葉、創世記一六章九節「：帰りなさい。身を低くしなさい。」を通して



独身でお仕えする」からこそ、教えられていること

私は夫婦で伝道者としてお仕えするところが願いでした。そのように導かれず、かといって独身でお仕えすることには葛藤がありました。そのような私に神様はさまざまなことを教えてくださいました。それは（1）神様が私の心を求めておられること（箴言二三章二六節）。

（2）私は神様に代価を払つて買い取られ、自分の願いを実現するためではなく神様の栄光を現わすために生かされること（Iコリント六章二〇節）。

（3）独身の恵みがあること（IIコリント一二章九〇—一〇節）などです。時間はかかりましたが、自分の願いを手放して神様が与えられている現状を受け入れ、委ねたとき、本当に平安が与えられました。様々な困難も予想されますが、思い煩うことなく主に仕えさせて頂きたいと願っています。

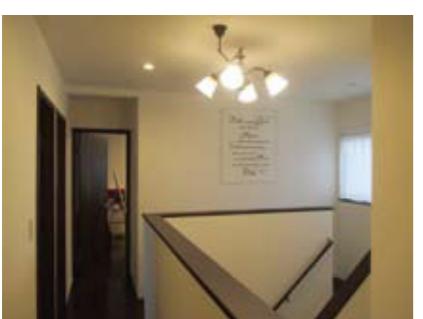
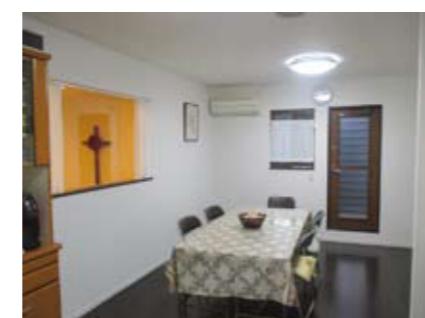
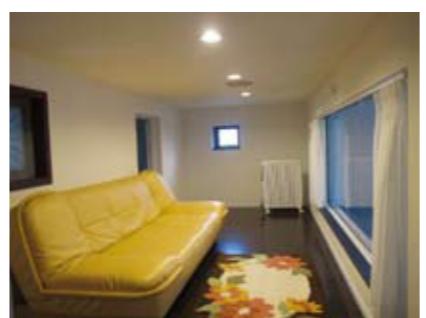
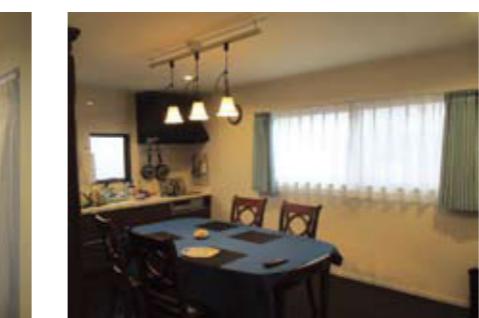
主の働きから逃げないよう神様の前に謙
るようになると私は語りかけられました。こ
の間、主の憐みの守りと祈りで支えてく
ださつた方々に心から感謝しています。

新会堂建設の経緯

すべて主の恵みの御業

希望の丘聖書バプテスト教会

牧師白井清之



主かジョンの繁栄を元とおりにされたとき
私たちは夢を見ている者のようであつた。

(詩編二六篇一節)

て頂いた旧会堂の近隣の方々も、新会堂の完成を喜んで下さり、27年の伝道の労をねぎらつて下さいました。教会の前を通る何人かの方々が、教会案内の看板を見て声をかけて下さいます。その全ては主の栄光であり、神の勝利です。「この宮のこれから後の栄光は、先のものよりもまさろう。」（ハガイ二章九節）私達は主が成して下さった恵みの御業に感謝しこの会堂を宣教と礼拝の為に用い、多くの方がこの会堂において救いに導かれる事を祈っています。

しの際には、施工業者への最終支払いが完了し、予算の想定外であつた外構工事の費用も備えられて、無事に献堂式を迎えることができました。勿論、完成までには、何度も信仰が試される出来事がありました。しかし、主は、私達が想像もない不思議な方法で必要な全てを満たして下さいました。28年前に知り合つた方が私達の教会のホームページを見つけて懐かしさから連絡して下り、会堂建設の計画を知つて支援を申し出て下さった通り、諸教会の聖徒達が私達の報告と証を

2008年6月、何も無くなつた旧会堂にたたずみ、蛍光灯、カーテン、椅子など、礼拝に必要な備品を限られた予算の中で一つ一つ買い揃え、やつとの思いで始まつた伝道開始の時を思うと、先の詩篇の御言葉は、新会堂が完成した時の私達の心境そのものです。痛みと悲しみから始まつた伝道は、しばらくの間、心に受けた傷を引きずりながらの歩みでしたが、それでも、私達の働きと召しはこの場所以外に考えることが出来ませんでした。主は、残された聖徒達を憐み、7年の苦難の歩みを経て、2015年10月に再び教会設立の恵みへと導いて下さいました。更に、主の奇しい摂理のうちに独立式の翌月に、他教会から新会堂建設の為の融資の申し出がありました。それ

の場所となる144坪の広い土地が格安で与えられました。その場所は、旧会堂からも駅からも近く、大通りに面し明るく、教会の建設地の条件を十分に満たしていました。「あなたの口を大きく開けよ。わたしがそれを満たそう。」（詩編八一篇十節）の御言葉の通り、主は、私達の為に素晴らしい地を備えて下さいました。その後、銀行から融資を受ける關係で、1年間、祈りと準備の期間が必要でした。だが、その間に会堂の設計に関して熟考を重ね、主の宮として相応しく、使い易い建物を目指して青写真を描き、設計図を何度も書き直しました。そこで完成した建物は、私達が当初計画した資金の倍以上の、立派で素晴らしい物となりました。そして、昨年10月の完成引き渡

て頂いた旧会堂の近隣の方々も、新会堂の完成を喜んで下さり、27年の伝道の労をねぎらつて下さいました。教会の前を通る何人かの方々が、教会案内の看板を見て声をかけて下さいます。その全ては主の栄光であり、神の勝利です。「この宮のこれから後の栄光は、先のものよりもまさろう。」（ハガイ二章九節）私達は主が成して下さった恵みの御業に感謝しこの会堂を宣教と礼拝の為に用い、多くの方がこの会堂において救いに導かれる事を祈っています。

は、余りにも思いがけない事でしたが、教会は、それを主の御心として受け入れ「あなたがたは、この山に長く留まつていた。向きを変えて出発せよ。」（申命記一章六節）の御言葉によつて、会堂移転に向けて祈り始めました。当初、私達は、融資の金額に見合う中古の物件を探

献金派入先

2018年3月發行 第75号 善行元:IBBF 国内宣教委員会 長野県北佐久郡軽井沢町 大字長倉4696-27

編集責任人：楊本昌
總編輯：楊昌博

デザイン:平田 健次